

観音物語 (10) 刀が落とせない

わくそうおうなん く りんぎょうよくじゅじゅう ねん び かののんりき どうじんだんだん ね
 或遭王難苦 臨刑欲寿終 念彼観音力 刀尋段段壊

或は王難の苦に遭い 刑に臨み寿終らんとするに 彼の観音の力を念ずれば 刀尋いで段段に壊られん

第二次世界大戦のとき、日丸五郎は中国へ遠征した。兵長五郎の任務は、中国人民を捕虜にして本部へ輸送する指揮官である。

村に日本兵が入れば、人民はたちまち姿をくramsす。おおかたは一目散に走り去っていくが、逃げ遅れる年寄りも次々と捕らえられ、たちまちトラック一杯になる。調書に住所、氏名、年齢、性別を記録して本部へ輸送する。捕まえる、調書を執る、監視をする、輸送する。この任務は激しい前線とはまた異なる忙しさがあつた。

いよいよ戦争が激しくなり、敗戦色が濃くなってきたころ、本部からとんでもない命令が入ってきた。

「捕虜はその場で処刑せよ」

この厳命に兵士たちは驚嘆した。兵長五郎の悩みは深刻である。寝られぬ日が悶々と続く。

「罪もない人民の首をどうしてはねることができようか。小生にはできません」

兵士全員が兵長に訴える。五郎の苦しみは尋常ではない。しかし、執行しなければ師団命令に背き、厳罰を受けることになる。本部への輸送がストップしたために、捕虜は増えるばかりで、監視ができない状態である。そのために、追っ手をゆるめて見逃すことになった。

現状を知った本部がふたたび命令を下した。

「なにを怯えている！」

兵士たちの困惑はますますつた。上官命令を黙止することができなくなった兵士 18 名は、処刑会議を開いて各自の担当を決めた。その手順にしたがって全員が任務を遂行することになった。

準備が整った刑場に、たすき掛けの五郎たち 12 名が一行になって現れた。

日本刀を握る羽目になった五郎は、生まれて初めて行なう人殺しである。戦争を恨んだ。両親や兄弟姉妹の顔が脳裏に浮かぶ。仏壇で拜んでいる亡き祖父母の姿も出てくる。幼いころの自分の姿が追憶される。わが家の床の間に飾られている白磁の白衣観音像がありありと現れてきた。全身が震える。無情な命令に激しい怒りを覚える。しかし、武者震いを隠すように、平然とした足取りで、覚悟を自分に言い聞かせながら、ゆっくりと刑場に入る…。

入口に立つ兵士たちは銃刀を縦に構えた。

すでに刑場では 12 名の老人がむしろに坐っている。

捕虜の顔は、引きつって真っ青。

執行人の眼は、充血して真っ赤。

逃げられぬ場面に 24 名が対峙させられている。

五郎たちは老人の背後に回って日本刀を上段に構えた。

老人たちが一斉に手を合わせた。

刀を握り絞めた。

合掌したまま動かない。

兵長五郎の刀は震えていない。まっすぐに天を突き刺した。沈黙の刑場に白雲がゆっくりと南へ流れている。頭上の雲は白蓮華の蕾のような形をしていて、花びらが開くように、ゆっくりと青空へ拡散している。

「斬れない」

五郎は刀を鞘に収めた。他の兵士 11 名も収めた。そして、そのまま黙って刑場を出た。銃刀を構えている兵士たちも執行人をそのまま退場させた。老人たちは合掌したまま瞑目している。

「処刑中止！」

兵長日丸五郎の指示に従って、これまでと同じような任務態勢に就き、黙って本部へ捕虜たちを届けることになった。トラックにエンジンがかかり、精気をとりもどした老人たちは一礼をしながら乗った。

翌日、軍曹から処刑中止の理由を日丸五郎に求められた。

「軍曹、無抵抗の老人をどうして斬ることができましようか。もしも、あのとき、捕虜が、叫んだり、暴れたり、逃げたりしたならば、私は追っかけて、やっていたかもしれません。あの老人たちは合掌を続けていました。そのお蔭で、つらなくてもよい罪を、つくらずに済んだと思っております。合掌の力です。どうぞ私を処罰してください」

軍曹は涙をにじませながら頷いた。

「わしも、師団司令部からこの命令を受けて眠られなくなった。日丸兵長、よく辞めてくれた」

五郎は軍靴を鳴らして直立敬礼した。